

自閉スペクトラム症の大学生・大学院生のレジリエンスに関する研究

萩原, 豪人 / HAGIWARA, Takehito

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

2023-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第580号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2023-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026665>

自閉スペクトラム症の大学生・大学院生の

レジリエンスに関する研究

要約

1. 自閉スペクトラム症および自閉スペクトラムの傾向のある大学生

近年、思春期・青年期の不適応や精神的な不調に関する問題の1つとして、自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD）を抱える大学生・大学院生（以下、大学生）の存在が注目されている。DSM-5（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition）によると、ASD は、「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」などに基づき診断される発達障害である（American Psychiatric Association, 2013）。しかし、ASD 者と健常者の間にスペクトラム状の広がりがあり、境界の特定はし難い（神尾・森脇・武井ほか, 2013）。

本田（2017）は、ASD の特性がありながらも ASD と診断する必要がなくなった人たちを「非障害自閉スペクトラム（autism spectrum without disorder: ASWD）」と呼んでいる。ASD の「特性を有しながらも成人期には治療や福祉的支援を要しないケースもある」という指摘をはじめ、生得的な ASD の特性が高いかどうかに関わらず、学生生活を問題なく送る大学生の存在を指摘する声は多い（岡本・三宅・永澤ほか, 2018; 土田, 2018）。

2. レジリエンスとその要因

ASD 者は適応および精神的健康に関するネガティブな面が高いことを指摘する実証研究は多い。一般的に ASD の傾向が精神的健康に悪影響を及ぼす可能性が高い中で、適応のよい ASD 者が存在するとすれば、何らかのレジリエンス（resilience）を有していると考えることができる。レジリエンスとは、Rutter（1985）によると、高リスク環境要因の経験に対する相対的な抵抗力、あるいはストレスや逆境の克服を意味する。

レジリエンスとしての効果を持つ様々な要因をレジリエンス要因と呼び、一般的なレジリエンス要因として、パーソナリティ特性、ソーシャルスキル、コーピング、ソーシャルサポートなど様々なものを取り上げられている。しかし、一般的なレジリエンスについての研究が進む一方、ASD 者についての有効なレジリエンス要因、それが適応や精神的健康に効果をもたらすメカニズムについては、いまだ明らかにされていない。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、適応のよい ASD の大学生・大学院生がもつレジリエンス要因とレジリエンスのメカニズムを明らかにすることである。本研究により、ASD 傾向のある大学生や同世代の若者に対して、適応や精神的健康の増進に寄与することができると考える。また、

ASD 傾向のある人に対して、幼少期からのより良い生育環境の在り方や支援の方法について、示唆を得ることもできると考えられる。

4. 本研究の構成

本研究は以下の構成からなる。

第 1 章 自閉スペクトラム症とレジリエンス

第 1 章は、「自閉スペクトラム症とレジリエンス」と題し、本研究全体の問題の所在と目的を記している。第 1 章第 1 節では、まず本研究に関する問題の所在と本研究全体の構成について簡潔に説明し、第 2 節では、現在に至るまでの ASD の概要とその研究についての歴史を辿り、第 3 節では、レジリエンス研究の概要と歴史を紹介し、第 4 節では、ASD および ASD 傾向のある思春期・青年期の若者のレジリエンスに関する研究を概観した。

先行研究では、思春期・青年期の ASD 者の若者のレジリエンスに関して、まだほとんど明らかにされていないことがわかった。また、日本国内の先行研究では、海外の研究と異なり、ASD の診断を持つ若者の実証研究は非常に少なく、一般大学生を対象として ASD 傾向の高低で特徴を比較する形の実証研究が多い。今後の研究により、明確にしていくべきポイントとして、ASD 者の有効なレジリエンス要因は何か、レジリエンス要因同士の相互作用やレジリエンス作用が高まっていくメカニズムはどのようなものか、レジリエンスの獲得プロセスはどのように進んで行くのか、等が重要であると考えられた。

第 2 章 研究 I：適応のよい ASD の大学生・大学院生のレジリエンスに関するインタビュー調査（質的研究）

第 2 章は、「研究 I：適応のよい ASD の大学生・大学院生のレジリエンスに関するインタビュー調査（質的研究）」と題し、適応のよいと考えられる ASD の大学生・大学院生 11 名にインタビュー調査を実施した結果と考察をまとめている。レジリエンス要因やレジリエンスのメカニズムについて、仮説の生成を行った。その結果、28 の概念と 4 のカテゴリーに分類された。

カテゴリーは、コーピング、自己認識、ソーシャルサポート（支援者や支援機関による分類）、ソーシャルサポート（支援内容による分類）の 4 つとなった。また、適応のよい ASD の大学生・大学院生のレジリエンスの要因と、レジリエンスを高めるプロセスについて、生成された概念とカテゴリーの関係を示しながら、結果図とストーリーラインを作成した。

第 3 章 研究 I における質問紙調査の分析

第 3 章は、「研究 I における質問紙調査の分析」と題し、第 2 章と同一の研究協力者に回答してもらった各種質問紙調査の結果から、インタビュー調査では明らかにするのが難しい、精神健康度、ASD 傾向、愛着、ストレスナーについての量的な分析を行った。

まず、本研究協力者の精神的健康度、ASD 傾向、愛着、ストレスナーの尺度からクロンバックの α 係数と平均値を算出し、それをもとに検討を行った。 α 係数の分析により、それぞれの尺度が、適応のよい ASD 者という特殊性をもった本研究協力者においても、内的整合性を有しているかどうかを調べた。すなわち全体として同じ概念を測定しているかど

うかを確認した。そして、それぞれの尺度の平均値の分析から、本研究協力者のこれらの変数について数量的な実態を把握した。具体的には、これらの平均値に関して、男女間の比較、カットオフ値との比較、先行研究で示された一般的な大学生のデータとの比較を行った。

分析の結果から、適応のよい ASD 者の精神的健康度、適応のよい ASD 者の ASD 特性、適応のよい ASD 者の愛着、適応のよい ASD 者の日常生活ストレス、本研究の課題の 4 点について考察を行った。

第 4 章 研究Ⅱ：適応のよい ASD の大学生のレジリエンスと学生相談室における支援（事例研究）

第 4 章では、「研究Ⅱ：適応のよい ASD の大学生のレジリエンスと学生相談室における支援（事例研究）」と題し、筆者が学生相談室に関わった ASD の大学生の事例を報告し、研究Ⅰで検討したレジリエンス要因やレジリエンスのメカニズムについて、実際の支援と照らし合わせながら考察した。コーピング、自己認識、ソーシャルサポートの 3 点については、研究Ⅰの結果と重なるところの多い事例であり、研究の妥当性が確認された。また、大学の支援として、入学前からの環境調整と環境の構造化の重要性が示された。

第 5 章 総合考察

第 5 章は、「総合考察」とし、第 1 章から第 4 章を通じての考察をした。先行研究やそれぞれの研究や考察で示されたことを統合、整理することで、本研究のまとめとし、考察をより深めた。また、本研究で扱いきれなかったものについては、課題として示した。

考察のポイントは、次の 5 点である。①自己認識の重要性、②効果的なコーピング、③支援を期待できるソーシャルサポートを増やす方法、④周囲からの早期の支援と支援者の姿勢、⑤本研究における課題と今後の展望。